

最新鋭スキー技法の具現者たち

栄冠を求めて

連載第1回 文・志賀仁郎

世界選手権やワールドカップのピステに展開される
トップスキーヤーたちの熾烈な戦い。しのぎを削りあい、磨き出される、
もっとも前衛的なスキー技法とは何か。それらの技法を日本ではどのように取り込み、洗練して、
完成度の高い基礎スキーのメソッドとして確立していこうとしているのか。そしてどのように一般のスキーヤーへと伝えていこうとしているのか。

1993シーズン、日本では、現在の世界のスキー技法の頂点にじかに触れる機会もなかった。
氷石で開かれた世界選手権大会は、ワールドカップのピステに進行するトップレーサー

れ、一般スキーヤーの技法として浸透し定着して行くのである。

日本の雪の上に展開された、世界のトップレーサーたちの技法は、人間がスキーというスポーツの中で到達した究極の技法といえる



K・A・オーモットは氷石でのアルペンスキー世界選手権大会男子GSで、2位に0秒87の大差をつけて圧勝。(カメラ/薬師洋行)

を見る事ができた。その技法は、94シーズンのワールドカップ、そしてリレハンメル冬季オリンピックに向け、各国チームによって研究、分析されて、それぞれのエースたちの技法として定着して行くだろうと予測される。幸いにも日本のスキーヤーたちは、氷石で、未来のスキー技法を見ることができ、そして尾瀬岩鞍での第30回技術選において、いま世界のスキーシーンに定着している技法を見ることができた。

技術選に出場したスキーヤーたちは、G・トエニやI・ステンマルクらが開発した技法を、一般のスキーヤーの技法へつなげる伝導師といっている。

1980年代のワールドカップを走り抜けた、ロック・ペトロビッチ、オズワルド・トエッチ、マイク・ファニーニらの技法、そして、それらのワールドカップレーサーと対等に戦った渡辺一樹、佐藤譲ら日本のトップスキーヤーたちの華麗なテクニクは、現在進行形の形で、いまのスキーを見せてくれるのである。

今回は、氷石で見られた前衛技法と、尾瀬岩鞍で触れた現在の技法とを比較しながら、現在の優れた技法とはなにかを探ってみよう。

パラレルターンとは どんな技術なのか

氷石の男子スラロームバーンは、高倉山の標高差180メートルの急斜面に造られた現在、世界のトップレーシングのピステのなかでも最高級のピステといえるバーンであった。注目のトンバは、氷石に来て体調を崩してこのスラロームだけの出場となったが、その体調はまだ充分回復していたとはいえなかったやうで、一本目に旗門をまたいで失格となってしまう。しかしながら、トンバは、ポールをまたいでしまったあともレースを続行してゴールまですべて、観客に、自分のすべりの技法をたっぷり見せてくれたのである。

たちによる最新鋭の技法の実験場として見てきたあるレースであった。

スキーの技法は、つねにトップレーサーたちの1000分の1秒を争う戦術の中から発し、スキー教師たちのすべりの中に洗練さ

内容をもった見事なものであった。私は多くのレースの中でとくに男子のスラ

ロームにおける、ケティル・アンドレ・オーモット、マーク・ジラルデリ、アルベルト・トンバらの技法に、新しい時代の新しい技法

トップレーサーであれば、自分の犯したミスは、その瞬間にわかっているはずで、当然その直後にレースを断念するのが当たり前だ。それを敢えてゴールまですべり切ったということに、「とにかく僕のすべりを見てくれ」といった彼の自負を感じることが出来る。

昨シーズン、やや調子を落として、彼としては不本意な成績に終わっているが技術的に見れば、トンバはいま、もともと優れたスラロマーであることは疑いの余地がない。彼の技法が、新しい時代のもっとも新しい技法なのである。そして、トンバを欠いた雪石のスラロームに勝った、オーモット、それを追いつめたジラルデリ、ふたりの技法は、ふたりにとっても生涯最高のすべりといつていい内容をもっていた。

トンバ、オーモット、ジラルデルのスキーを分析することによって、新しいターンのテクニクが見えてくるのである。

前衛技法に 共通するのはなにか

3人に代表されるスラロームの技法には、それぞれにある特徴を上げることができる。それは彼らの技法の前衛的要素であり、また彼らの個性といえるのだが、その違いを越えて共通する部分もまた多い。その共通する部分は勝つスラロームのセオリーといってよく、そのセオリーは、トップレーサーたちにとつての技術の基本なのである。

トンバのスラロームを見た人は、だれでも彼の下半身の柔らかさ、上体の安定感に驚嘆する。そして、スキーがつねに雪面にはりついていることに目を見張り、堂々たる重量感に圧倒されるのである。

トンバは、いま究極のパラレルターンの技法を見せてくれている。その技法は、2本のスキーをつねに雪面に押しつけて、スキーの走りをつかむ技法であり、2本のスキーの4本のエッジをもっとも効果的に使い分ける技法といえるのである。



人並はずれた強靱な肉体
しかも、それは人並はずれた
柔らかさをもっている。
そのうえ、優れた反射神経
をもっているのだから、あ

のスラロームは超人にのみ可能な技法として
一般に理解されているのかもしれない。

しかしながらトンバの技法は、既に各国チームによって分析されていると同時に、一般のスキーヤーに伝えうる技術として各国のスキー技術の研究者、さらにスキー教師養成コースのなかに浸透しているのである。

イメージのなかの パラレルターン

スキーヤーにとってパラレルターンは憧れの技術であり、至難の技術であったといえるだろう。

約30年前、現在の技術選のルーツとなっているデモンストレーター選考会が発想された当時、パラレル・クリスチャニアは、超難度

「シュビンゲン」のいうパラレルとは、ベダ
ル動作とひねり踏み蹴りを洗練したものだ
(小社刊「シュビンゲン」112頁より)

の技法であった。

パラレルターンの完成には、1000日の猛練習が当り前とされ、シュテムからはパラレルは生まれぬという悲しい言葉がスキーヤーたちを絶望の淵に沈めていた。

なぜそんなに難しかったのだろうか、それは当時のパラレル・クリスチャニアのイメージにあった。

「両スキーをびったりと揃えて、つねに両スキーを同時に操作する」ことがパラレルだったのである。

63年、来日したオーストリアのクルツケンハウザー教授一行の技術を紹介する『シーハイル』という本のなかの、ライナー・シュブング(純粋なターン)の部分には、

「開き出し(シュテム)を使わずに、つねにスキーをびったり揃えてなされるのでライナーシュブングといわれ、また平行のまま行なわれるところからパラレルシュブングとも呼ばれる。

シュテム技術のようにスキーの開き出しを使わないので、両足で同時に踏み蹴って姿勢を切りかえ、きつかけをつくる。」

と説明されている。一瞬もスキーを離さない、両スキーを開いたり、ハの字にしないその高度な技術は、まさに至高のテクニックであった。

世界中のスキー技法の研究者、指導者は、このパラレル・クリスチャニアを、どう身につけさせるかの研究、実験に明け暮れていた。そして、ついには「シュテムからはパラレルは生まれぬ」という結論が導き出されていた。

68年第8回アスペンインタースキーでは、シュテムとパラレルのギャップというテーマは消滅し、さらに71年の第9回ガルミッシュシュインタースキーでは、1970年代に進行した技術革新が一般のスキーヤーに浸透、パラレルのイメージは、大きく変わっていった。

73年の第10回ヒソケタトリインタースキーでは、左右のスキーを、交互に使う技術が、主流となって、パラレルターンは「両スキーを平行に使うターン」という常識が定着して、

両スキーをつねにピッタリ揃えて回るターンを至上とする考え方は消滅しているのである。

79年の第11回蔵王インタースキーでは、その常識が追認され、各国のデモンストレーションの演技のなかから同時操作の技法は消えている。

その後、80年に発刊されたオーストリアのスキー教程『シュビゲン』のパラレル・シュビゲンの項では30ページにわたり25組の分解写真を使って、この技法が解説されているが、そのなかに、同時操作と呼べるものはまったくない。谷スキーを踏み蹴る。

山スキーに踏み替える、といった表現でターンの始動期が分析されているが、その技法のすべてが交互操作となっている。ところが、日本には、そうした世界のスキー技法における常識はなかなか浸透していない。

それは、日本人には、強いパラレル信仰があるからなのである。30年前、血のにじむような猛練習をして、至高の技法、パラレル・クリスチャニア、ウエーデルンを習得した人達が、SAJの教育本部の重要な位置を占めているという状況が続いている限り、「あのパラレルは消滅してしまっただ」という現実を認めるはずもないのである。

そしてまた、日本人特有の美意識によって、あの優美なターン、パラレルターンを至高のものとする伝統がいまなお生き続けているのである。

最新のSAJスキー教程の中のパラレルターンの習得の部分にも12ページが当てられ、多くの分解写真が使われているが、その配列を見れば、教程が求めているパラレルターンは、相変わらずピッタリと両スキーを揃えて、同時に操作する、パラレルターンなのだといふことがわかるはずだ……。



「日本スキー教程」ではバランス保持と舵りの習熟によるスキーの同時操作となっている(スキージャーナル刊、全日本スキー連盟編「日本スキー教程」102~103頁より)

技術選の パラレルターン

日本のスキー界に残る、パラレル信仰は、技術選にどんな影を落としているのだろうか。この数年の技術選でのパラレルターンの演技は、実はその信仰とは関係なく現在のワールドカップのピステに進行している技術革新が、そのまま投影しているように見える。

上位にランクされた、日本人の渡辺一樹、佐藤謙、志鷹慎吾らの技法は、海外からの参加者、ファニー、トエッチ、ペトロピッチらと共通する、世界のトップ技法であった。

彼らのスキーは、トンバ、ジラルデリ、オーモットらの見せた前衛技法とも通ずる最新技法であったといえるのである。

この種目のジャッジの視点として上げられているポイントは

- 切り換えにおける重心移動が正確であるか
- ターンの後半の舵とりが正確であるか
- この運動の中で脚を中心とする運動が適切で調和のとれたものであるか

といった点が重視されていた。

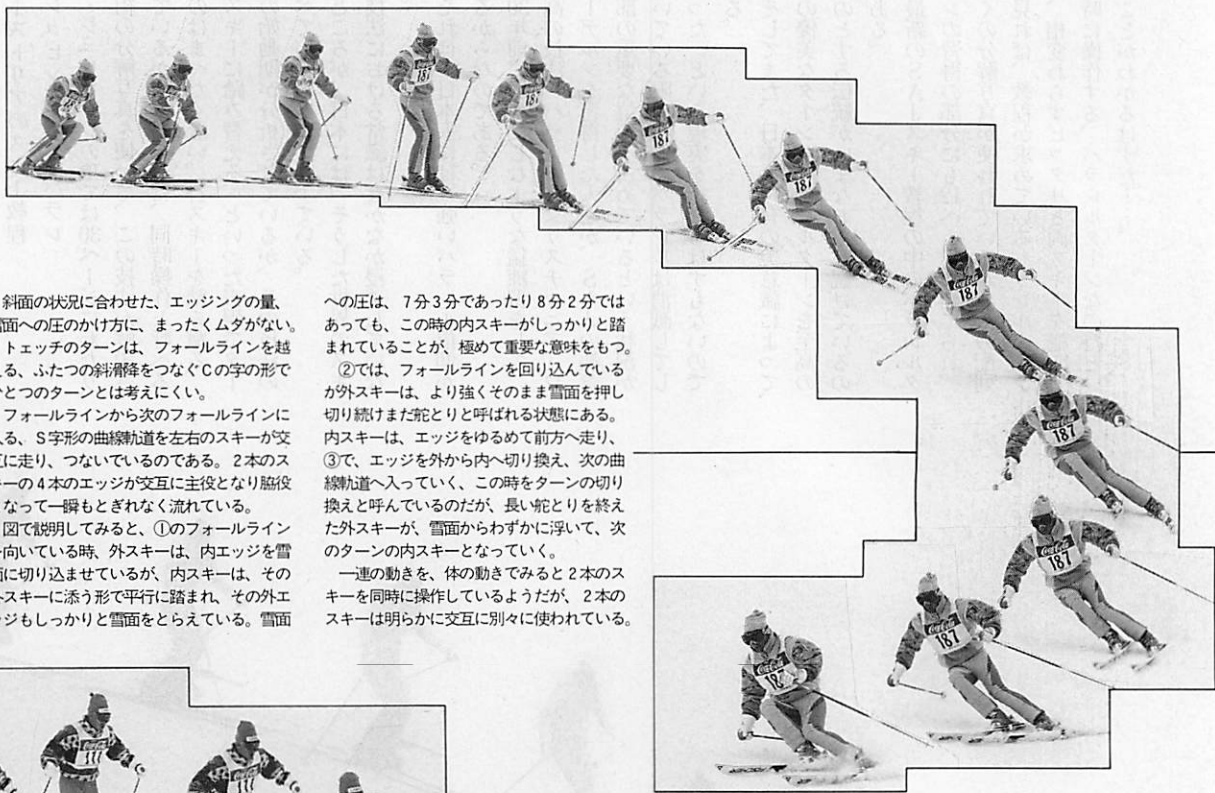
ピッチリと両スキーを揃えて同時に操作するという視点はそこにはないのである。

すべての選手達のほとんどすべてが「ターンの舵とりの部分をいねいに仕上げるように心掛けた」と語っている。そこにも古いパラレル信仰の影はない。

舵とりを重視するという考え方は、イタリアのトエッチやレオンチェリたちが「よりすべらせる」ことに重点を置いてすべると語っていたこと、同じ意識だといっている。

いかにすべる速いスキーをするか、を求めるレースの世界にある人々にとっても、完成度の高い、しかも快感度の高い技法となっているのである。

スキーは、曲線軌道から曲線軌道を結ぶものとする現在のターンの考え方は、技術選では既に常識となっているのである。



オズワルド・トエッチ

(ITA)

トエニ、グロスが活躍した、アバランチアズーロ（青い雪崩）の時代と、トンバ出現の時代をつないだイタリアスラロームチームのエースはワールドカップのピステにいた時からそのすべりの美しさに定評があった名手だ。

技術選に第29回、第30回と連続出場して日本のファンに華麗なテクニックを印象づけているが、この第30回大会での彼のスキーの完成度の高さには、驚かされる。

私の目から見た限りでは、トエッチこそ、もっともわかりやすい形で、世界のトップ技法を演じられるデモンストレーターといえる。

つねに「走るスキー」を意識し、雪面へのコンタクトを大切に、そのターンは、切れ、走りともに文句なく超一級品であった。

斜面の状況に合わせた、エッジングの量、雪面への圧のかけ方に、まったくムダがない。トエッチのターンは、フォールラインを越える、ふたつの斜滑降をつなぐCの字の形でひとつのターンとは考えにくい。

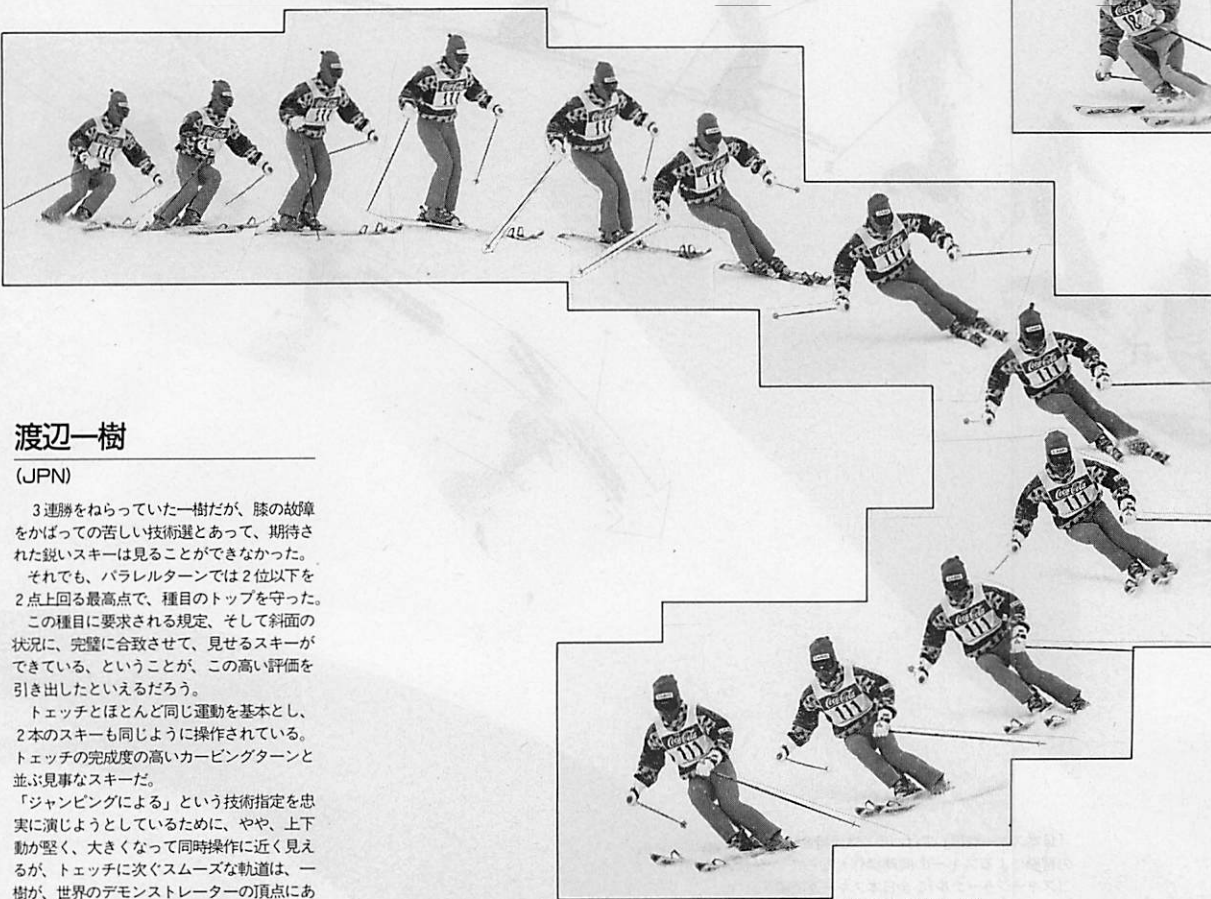
フォールラインから次のフォールラインに入る、S字形の曲線軌道を左右のスキーが交互に走り、つないでいるのである。2本のスキーの4本のエッジが交互に主役となり脇役となって一瞬もとぎれなく流れている。

図で説明してみると、①のフォールラインを向いている時、外スキーは、内エッジを雪面に切り込ませているが、内スキーは、その外スキーに添う形で平行に踏まれ、その外エッジもしっかりと雪面をとらえている。雪面

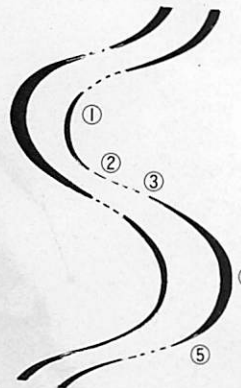
への圧は、7分3分であたり8分2分ではあっても、この時の内スキーがしっかりと踏まれていることが、極めて重要な意味をもつ。

②では、フォールラインを回り込んでいるが外スキーは、より強くそのまま雪面を押し切り続けまた舵とりと呼ばれる状態にある。内スキーは、エッジをゆるめて前方へ走り、③で、エッジを外から内へ切り換え、次の曲線軌道へ入っていく、この時をターンの切り換えと呼んでいるのだが、長い舵とりを終えた外スキーが、雪面からわずかに浮いて、次のターンの内スキーとなっていく。

一連の動きを、体の動きでみると2本のスキーを同時に操作しているようだが、2本のスキーは明らかに交互に別々に使われている。



パラレルターンにおける
2本のスキーの動き方



渡辺一樹

(JPN)

3連勝をねらっていた一樹だが、膝の故障をかばっての苦しい技術選とあって、期待された鋭いスキーは見ることができなかった。

それでも、パラレルターンでは2位以下を2点上回る最高点で、種目のトップを守った。

この種目に要求される規定、そして斜面の状況に、完璧に合致させて、見せるスキーができて、ということが、この高い評価を引き出したといえるだろう。

トエッチとほとんど同じ運動を基本とし、2本のスキーも同じように操作されている。トエッチの完成度の高いカービングターンと並ぶ見事なスキーだ。

「ジャンピングによる」という技術指定を忠実に演じようとしているために、やや、上下動が堅く、大きくなって同時操作に近く見えるが、トエッチに次ぐスムーズな軌道は、一樹が、世界のデモンストレーターの頂点にある証ともいえるはずである。

(カメラ/武山 登)